

茶の湯文化学会会報 No.47

第47号/2005年11月10日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

台湾の茶を訪ねて

第二十二回研究会報告

高橋忠彦

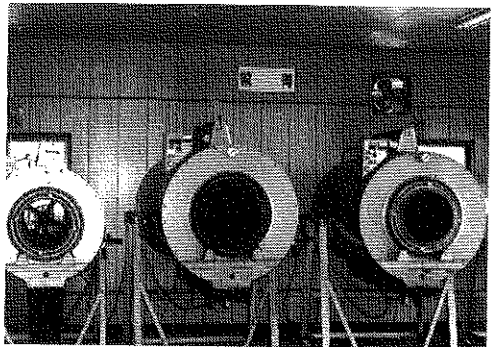
茶の湯文化学会の第二十二回研究会は、台湾の茶業の見学を中心に、八月五日より、九日まで四泊五日の日程を組んで行われた。会長はじめ、一四人の参加を得、台風九号が通り過ぎたばかりであったが、無事に終了した。以下は簡単な報告である。

八月五日に台北に泊まり、翌六日に、徐英祥先生と合流し、南の南投県に向かった。徐先生は茶業改良場で長く活躍されてきた方で、台湾茶業史の生き字引といえる人である。南投県に近づくにつれ、檳榔売りの小店がふえてくる。いたるところの山野に檳榔樹が並び、その間に茶とパイナップルの畑がひろがる。南投県の順発製茶廠で半球形烏龍茶（正確には包種茶。凍頂烏龍や高山茶など、現在の台湾茶の主流を占める）の製造に欠かせない団揉工程を見学する。萎凋を終えた茶葉を、機械を用いて布で包み、二〇斤の珠にする。それを揉捻器でもみ、乾燥器にいれ、それを三〇回くらい繰り返すのである。この乾燥器と揉捻器が一台ずつあれば、夫婦で経営するような小規模の製茶場が経営できるそうである。

その後、竹山から山に登り、凍頂烏龍で名高い鹿谷郷に着いた。凍頂山は、鳳凰山と麒麟山に挟まれた小

山であるが、折から降り出した豪雨のため、じっくり見物することはできなかった。張登雁さんの店で茶の試飲をし、生茶と軽火茶の比較をさせてもらう。生茶にしたての生茶が一年以上経たものを陳茶と呼ぶ。一年経ったら軽火茶、さらに一年ごとに火入れをし、中火茶、重火茶としていく。その後も三〇五年ごとに火入れをすれば、五〇年は保つそうである。鹿谷郷には農会の茶業文化館があり、二階には茶業に関する写真や図版、実物を多く展示し、古い製茶器も見られた。茶業改良場の鹿谷工作站では、台湾の代表的な茶の試飲をした。もちろん烏龍茶の類が多いが、他に低カフェインの茶、烏龍茶のギャパロン茶、金銀花茶など、健康茶も多様であった。

八月七日、南投市内より出発し、台湾有数の観光地でもある阿里山に登った。道の急峻なことは、凍頂山の比ではなく、登るにつれて、熱帯から亜熱帯へと植物相の垂直分布が見られるほどである。阿里山山上には茶畑や、有機野菜、蘭の畑が広がる。ここで作られる茶は、もちろん「高山茶」に属し、葉が大きく肉厚である。ただし、製法は南投・鹿谷と同じ半球形包種茶である。良質の珈琲も産するようだ。



阿里山鳳聖製茶廠で、主人の王昭坤さんに、工場を案内してもらった。茶の萎凋のための近代的な設備が目を引き。晴れた日は戸外に葉を敷き詰めて萎凋するが、霧の多い日は、温室のような萎凋室で行うのである。伝統的な萎凋は、茶葉を円形の竹器（筥籠）に載せて棚に置くが、鳳聖製茶廠では、それも機械化し、大量の萎凋を可能にしている。茶の試飲の際、室内のきらびやかな神棚が目を引き。福建中心に崇拜されている女神媽祖が祀つ

である。神様に三杯の茶を供えるのは、一般的な習慣であるが、ここではやや珍しい供え方をしていった。水を満たした茶碗を三個一列に並べ、その上に、乾いた茶葉を入れた茶碗を三個一列に並べるのである。水は毎日取り替えるが、茶葉は月の一日と二五日に、献果する際に取り替えるのだそうである。

阿里山を下り、北上して峨眉に向かった。東方美人（膨風茶）の産地を見学するためである。東方美人は茶樹にウンカ（ヨコバイ）がついた場合だけ生産可能な特殊な茶で、台湾の苗栗県頭份、新竹県峨眉・北埔などの地域でしか生産されない。ウンカが食った葉は、緑から黄色に変色し、多く噛まれるとより黄色が濃くなる。そのような葉を六月五日前後



に集めて製茶する。五分間の揉捻しか行わないので、葉の形が比較的残っているのである。峨眉の徐耀良さんの茶園で試飲をする。徐さんの東方美人茶は、ここ数年、連続して特賞を獲得し、表彰額の置き場が無いほどである。試飲の際、立ち上がった湯をかなり高くから注ぐのが印象的であった。温度を下げるためであろうか。峨眉から更に山奥の北埔で宿をとった。実際に見聞した訳ではないが、このあたりは客家が多く、特殊な文化を保持している。観光客に擂茶を飲ませる施設も有るようである。（土産物の擂茶も市販されている。）

八月八日の午前中に、桃園県にある茶業改良場を訪問した。ここは、一九〇三年に台湾总督府殖産局製茶試験場として設立されて以来、台湾の茶業振興の中心となってきたところである。現在の名称は、行政院農業委員会茶業改良場という。さまざまな活動の中で第一に挙げられるのは、茶樹の品種改良であろう。その庭にさまざまな茶樹の見本が並んで植えられていた。因みに、現在台湾で用いられている主要な品種としては、烏龍茶（包種茶）に向く金萱（台茶一二号）・翠玉（台茶一三号）・四季春・青心烏龍、東方美人に向く青心大有などが知られる。台湾茶を紹介す

るビデオを見たあと、ここでも、各種の茶の試飲を行った。製茶の機械も新旧取り混ぜて揃っていて、貴重な施設である。

昼過ぎに台北に戻り、故宮博物院に赴き、研究員の廖宝秀先生より、「乾隆の茶舎と竹茶炉」という講演をしていただいた。乾隆皇帝が明の文人茶文化に傾倒した様子を、遺跡や文物の調査に基づいて説明された、優れた研究成果であった。夜は市内の陸羽茶芸中心で、陸羽茶学研究所所長の蔡榮章氏らと交流し、天仁茗茶の歴史などを展示した部屋で、無我茶会の実演を見学した。

台湾の茶に勢いがあるのが実感できる四日間であったが、烏龍茶（包種茶）、それも半球形のものが主流を占め、個性のある茶で生き残っているのは東方美人のみという感想を抱いた。徐先生にうかがったところ、政策的に緑茶や紅茶にはあえて力を入れない方針だそうである。茶樹にしても、昔はよくあった白毛猴はもう用いないという。なお、以前からの疑問であった「青心大有」の「有」について、南投の茶業者に尋ねてみたところ、広東語の「拍有」と同形だが別の言葉だろう、やはり由来はよく分からないとのことであった。ただ、話しながら得た感触では、「方」とは

違うこと、むしろ「胖」の音通でないかということが推測できた。これも一つの収穫である。最後に、今回の企画に大きな力添えをいただいた小泊副会長にお礼を申し上げたい。

大 会

本年度の大会を前日の総会に引き続き、五月二二日（日）一〇時三〇分から池坊短期大学で開催した。午前中に三つの研究発表、午後三つの研究発表とシンポジウム「武野紹鷗」と題して基調講演およびパネルディスカッションがあった。その要旨は次の通りである。

「峯すり」についての一考察

岡本文音

『南方録』では、「峯すり」「スリガネ」という言葉もちいて、道具の置き合わせについての記述がある。そしてまた「峯すり」というものについて、「音楽」という言葉もちいて説明がなされている。これらのことから、利休の生きていた桃山時代、もしくは『南方録』が世に顕された元禄時代に「音楽」という言葉を使って、「峯すり」という道具の置き合わせについての秘伝を説明すること

が可能であり、それらの時代における人々、少なくとも茶の湯を愛好し実践していた茶人たちにとって、「音楽」というものが身近な存在であったということが窺える。

日本の伝統的な音楽では、今日われわれの聴く西洋音楽の大半と比べると、ずいぶんと曖昧で、いわばアナログなところに美意識をおいているようなところがあり、「揺れ」「ずれ」を大切にし、そして積極的に「揺れ」「ずれ」を作りだすことさえしている。

近代における家元の建築活動

松本隆隆

近代における家元の建築活動として、表千家・裏千家家元の過去から継承されているものと新しく付加されたものを分析。明治二〇年頃家元茶道の復興がみられる。家元茶道の鑑化に繋がる建物修復という建築活動に注目した。裏千家では明治四一年より「今日庵月報」が創刊され、明治四四年の同月報に「又隠」など裏千家の代表的な茶室修復を地方に広く呼びかけている。そして明治四四年二月に財団法人今日庵の創設、同年六月に無色軒・寒雲亭・又隠・今日庵・咄々斎という、今までの既存茶室の修復と広間の増築が大正一三

年に完成している。これらのことは、近代的名家元組織の第一歩ともいえよう。また豊国廟に昭和四年に建築された桐蔭席は、小間と広間から構成されている。小間席は、猿面の席の写しとして計画実施され、ほとんど変更がされていないが、広間に関しては、計画が進むにつれ、平面が拡大された。これは、秀吉と茶道の結びつきを強調したものと考えられる。

表千家家元に関しては、東京出張所が昭和三〇年頃に建築されている。京都の家元の茶室の写しによって構成され、新しい意匠を加えず平面のみ拡大して建築されている。家元にとつての写しというものは家のアイデンティティーを保証するもの、或いはその時代における茶道の社会的地位向上を行い形にあらわしている。

女学校における「花」「茶」の受容

—明治期の事例を中心に—

小林善帆

今日、「花」（花道・いけばな）「茶」（茶道・茶の湯）の受容人口が女性優位であることは誰もが知るところであるが、江戸中期までは男性優位であり、明治期以後の学校制度

との結合が、その女性受容人口の増大を決定的にしたとされてきた。すでに高等女学校令施行後については、「花」「茶」が高等女学校教育で大きな役割を占めたかのように考えられがちであるが、決してそうではなかった（拙稿『女性史学』第一二号 二〇〇二年）ことを明らかにした。果たして女性受容人口の増大を決定的にした要因が女学校における取入れであったといえるのであろうか。

女学校における「花」や「茶」の受容について、これまで教育課程や教育活動全体を視野にいれた具体的な考察もいままに述べられている。今回の報告は、明治期（特に高等女学校令施行以前）の女学校の教育課程や教育活動全体からみて、どのような取入れがあったといえるかということに焦点を合わせた。その結果、どの学校からも「花」「茶」が正課の学科目として取り入れた事例は見出せない。いわば学科目や教育活動に付随した形での取り入れであったことがわかる。また必ずしも取り入れられたわけでもない。

陸羽伝の成立とその展開

木村栄美

唐代の喫茶文化については、陸羽及び『茶

経』を中心に、その喫茶法、製茶法が論じられてきた。陸羽はそれだけ、唐代喫茶文化ばかりではなく、今日までの日中喫茶文化展開を考察する上で、欠かすことはできない存在である。しかし、陸羽が、後世の喫茶文化の中にどのような影響を及ぼしたのか、また、陸羽伝がどのように形成され、茶神、茶聖と称されるようになったのはいつ頃からなのかについては、これまでに明確にはされていない。従って唐代の主な文献から陸羽の伝記や逸話を採り上げ、陸羽伝の原型は、どのようなものであったか、唐代以降、陸羽伝はどのように展開していったのか、その系譜を辿り、各時代における喫茶文化の変容の中で、陸羽の存在がどのように位置づけられていったのか、その影響を考察。

大名と茶師—柳川藩立花家の事例

岡 宏憲

従来の大名—宇治茶師研究は、主に諸大名から宇治茶師宛に出された上林文書を中心になされてきた。大名から京都商人に宛てて出された文書より大名・茶師・京都商人の関係から、茶壺がいかにして宇治より大名家の手元に運ばれたかについて考察。具体的には、

「茶人立花宗茂について」「富士谷文書と呉服所富士谷家」「立花家の茶壺入手経路」から、立花家の場合、「富士谷文書」より大名—茶師の関係は、従来の見解のような大名・茶師二者間のみの間柄ではなく、上林・富士谷家・竹子宗元・村田了句らのネットワークのもと、なされていた事が明らかとなった。

またその中で愛宕山に「上」「下」げする専門の村田了句といった人物の存在も確認できた。京都に屋敷がなかった柳川藩の場合、呉服その他諸品調達といった任務はすべて富士谷家が担っていたため、茶壺購入にも富士谷家が関わってくることは必然的であった。

千利休の経済的側面

中村修也

千利休をはじめとする堺茶湯者については、これまでは文化史的な方面からの研究は進められてきたが、経済的側面からの研究はまだ少ない。もし、茶の湯が純粹に文化的存在であったならば、室町—戦国時代という短時日に全国的に広がった理由を解き明かすことは困難となる。しかし、茶の湯が博多や堺といった商業港湾都市で発展した意味を経済性に見出すならば、一つの仮説が成り立つ。中国が

ら唐物、朝鮮からやきものの輸入による利益を考えた時、山口・博多・堺という海外貿易の拠点に茶の湯文化が発展したことも理解しやすくなる。

千利休に絞って、茶の湯における経済的側面を検討し、利休の経済的活動を茶会や書簡から拾い上げて、茶の湯の商業的側面を裏づける試みを展開。また、利休の曾孫江岑宗左が残した『江岑夏書』の記述に見出せる、利休の経済活動をも指摘する。たとえば、茶杓の下削りについての箇所である。これまでは下削りされたものを利休が仕上げるといって芸術的生産の一過程として理解していたが、注意して読むと、利休の芸術あるいは茶の湯に使用する茶杓の数はそれほど多くないはずであり、贈答としても数えるほどである。しかるに、複数の下削りが存在するということは、茶杓が商業目的で生産されていたことを推測させる。

シンポジウム

「武野紹鷗」

基調講演

戸田勝久

今年、紹鷗没後四五〇年にあたる。紹鷗に

ついては、西堀二三氏が戦前の創元社『茶道』に「紹鷗伝探求」を書かれたのが紹鷗研究の嚆矢と言える。その中で『実隆公記』を使って紹鷗について述べられている。その後も紹鷗についての史料はいくつか紹介されているが問題が多い。

さてその『実隆公記』の大永八年三月九日の条に、連歌師の印政が三條西実隆の所へ紹鷗を連れてやってきたことがでてくる。実隆は前の内大臣であり、この人との出会いが紹鷗にとつて極めて大きな意味を持つことになった。印政は紹鷗を伴った時以外この『実隆公記』にはでてこない。紹鷗の財力をもってすればもつと有名な連歌師に仲立ちを頼むことができたはずなのに、なぜこの二流とも言うべき印政に仲立ちを頼んだのか。そこに紹鷗の深慮が働いているのを感じる。『山上宗二記』に紹鷗は三〇まで連歌師であったという記述がある。連歌師とは職業連歌師であったという意味で、解釈に注意を要する。ただ深く連歌を志していたという紹鷗の生き方がこの一文の裏にはある。

また享禄三年三月二日実隆から『詠歌大概』を与えられているが、これがその後の紹鷗に多大な影響を与えることになり、晩年の

定家色紙の使用へと続く。『実隆公記』享祿五年二月二日の条に紹陽の出家について書かれるが、従五位因幡守の位を得て武野家の再興を果たし、その後紹陽として生きることを選んだ仲材の姿が見える。

シンポジウム

戸田勝久、田中秀隆、影山純夫、

谷 晃(司会)

田中 戸田先生の「武野紹陽研究」の中に、紹陽は武野仲材が残した飯の姿という指摘があるが、このテーゼに縛られることなく考えたとすれば、道具の面から考えるのも一つの方法であろう。茶入でいうとすれば、茄子の茶入を受容したのが紹陽の茶で、肩衝を受容したのが利休、秀吉の時代の茶ではないかと思う。

影山 戸田先生の『武野紹陽研究』の影響下に辻玄哉について考えたことがある。『武野紹陽研究』の中で最も重要な指摘は、紹陽の茶の基調を支えるのは古岳への参禅ではなく実隆に学んだことであるとの指摘であろう。弟子の玄哉を考えてもその指摘は正しいように思う。

谷 紹陽を考える場合その道具を考える必要

休の目指した茶の関係をどう考えたらよいか。

影山 わび茶は紹陽によって完成されたと考えられる。利休は紹陽を乗り越えようとしたことは確かだが、それほど大きく紹陽の茶を変えたようには思えない。

戸田 これは『南方録』の評価に係るが、『南方録』に書かれた定家と家隆の歌で紹陽世界の豊潤さ緩やかさと、利休の世界の厳しさがいえるのではないか。

谷 話題が変わるが、従来からいわれてきた、紹陽から利休へという師弟関係は、寛永初年頃に書かれた『塚数寄者の物語』からはほとんど伺うことができない。これをどう考えるべきか。

影山 二人の関係は、『山上宗二記』を見る限り、直接的な師弟関係であったようにはいえない。二人の間には必ずといっていいほど辻玄哉がいる。利休の師は北向道陳であったと考える方がよい。

谷 織部の言葉を書き記したという『慶長御尋書』にも、織部が利休に道陳と紹陽のことを聞いたところ、利休は基に例えれば道陳一目強く候といったと記されている。『山上宗二記』になると道陳はそれほど評価されてい

があり、特に茶入に注目すると紹陽の茶での茄子の重要性から利休時代の肩付きの評価への価値変化の指摘があったが、その理由は何か。

田中 『山上宗二記』には二種類あり初めに茶道具が出てくるタイプと、茶の湯の歴史が出てくるタイプ、茶道具の位置づけも変わってくる。前者ではまず茄子について書かれ、後者では肩衝についてまず書かれるように変わる。この背後には唐物に対する評価の変化があり、宗二がより当世風に書こうとしたのではないかと考えられる。紹陽が玄哉に伝えた小壺の次第の小壺も茄子と考えてよいのではないか。

戸田 高橋箒庵の編集した『大正名器観』でも茶入はまず肩衝から始まる。古くから唐物茶入では肩衝の評価が最も高く、この評価は変わらない。わび茶が成立することで小壺の評価が変わってきた。紹陽のみおつくしの茄子には底に墨で「みほつくし」と書き花押を入れていた。唐物茶入に墨書をするなどともないことだったが、物に人格を付与するという意味を持っている。わび茶は物と人との調和に成立する。

谷 『山上宗二記』は天正一六年頃の成立だ

ない。そこに何らかの価値判断が働いているのではないか。

戸田 茶の湯の歴史の長いスパンの中で考えるべき問題だろう。茶の湯の生きた伝承、茶の湯の伝統がどのように生かされ具体化されていくかが重要なのではないか。

平成十八年度茶の湯文化学会大会のお知らせ

日時 五月二〇日(土)
場所 プラザエフ(東京都)

大会での発表者を募集いたします。詳細は学会事務局までご連絡ください。

例会のご案内

〇一月二六日(土)午後二時
東京例会
東京芸術大学

羽箒について 下坂玉起氏
狂言と茶 福良弘一郎氏

〇一月二八日(土)午後二時
再び少庵妻・宗且母について 東京芸術大学
中村修也氏

が、その内容は天正一四〜五年頃の茶の湯界の状況を示している。そのころの茶は、茶会記を見ると道具の使用に変化の見られる時期である。天目もこれ以降急速に使われなくなる。茄子から肩衝へという変化はこの使用道具の変化と関係するのか。

田中 時代を長いスパンで見れば、肩衝の評価は変わらないかも知れないが、信長から秀吉へというスパンで見れば、茄子から肩衝へという変化はいえるのではないか。

谷 江戸時代の書に茄子は天子、肩衝は將軍などと書いている物があるが、これをどう考えればよいのか。
戸田 禁中茶会でも肩衝を飾り茄子で茶を点てているのであって、肩衝の上位は動かない。紹陽のわび茶の成立から、茄子の評価が高まる。

田中 わび茶をどう考えるか、そのそれ微妙に違っているが、紹陽から始まるとも考えられるだろう。また名物道具と小間の使い方でもわび茶の成立を考えることもできる。

谷 わび茶の成立を考えると、珠光、紹陽、利休という流れで考えられてきた。『山上宗二記』では利休は紹陽の茶をことごとく改めたと記されているが、紹陽の目指した茶と利

東海例会

〇一月二五日(金)午後六時〜八時三〇分
名古屋文化短期大学 アセンブリ・ホール
大徳寺玉舟宗璠の茶 谷端昭夫氏
尾張徳川家大曾根邸「山の茶屋」成立の謎と位置づけ 谷口剛久氏

近畿例会

〇二月一〇日(土)午後二時
池坊短期大学六二号教室
鳥取藩茶道役の研究 岡 宏憲氏
演題未定 矢野 環氏

高知例会

〇二月一日(日)一〇時
高知県立文学館慶雲庵茶室
シンポジウム「茶室の変遷」・茶事
〇二月二六日(日)一〇時
高知県立文学館慶雲庵茶室
大名家の茶の湯

お知らせ

茶学の会シンポジウム
「茶業と茶の湯」

開催の主旨

茶の湯は日本を代表する文化のひとつとして海外にも広く知られる。勿論、そこでの主体は「茶」であるが、茶の湯に関わる人々において茶の生産に対する関心は高い。同時に茶業者においても茶の湯への関心は高いと言いたい。最近、茶業界において、茶文化への関心が高まっているが、具体的に茶の文化についてのイメージに乏しい。茶の文化を考えるに当たり、当然、茶の湯はそれを代表するもののひとつである。そこで、今回、茶に関わる全ての人々がそれぞれの立場から、あらためて茶文化の原点を再認識するとともに、茶業界の根底となる茶文化とは何かをみんなで考えることを主旨に本会を開催する。

開催日：平成一七年一月二六日(土)

二七日(日)

会場(予定)：静岡県総合教育センター

「あすなる」(掛川市富部)

参加費 四千元(講演論文集代を含む)

(学生：二百円)

事務局：茶学の会 (代表 小泊重洋)

四三六〇〇四六 掛川市中央高町一八

TEL・FAX〇五三七―二四―四八六四

参加申し込みは、住所、氏名、電話番号明記の上、上記事務局まで、手紙またはFAXでご連絡ください。交通、宿泊、参加費納入方法などお知らせいたします。

後記

*前号の東京例会のご案内につきまして佐藤留実氏「円覚寺の伝法衣と表装裂」と吉岡明美氏「蔭涼軒日録にみる表装裂」の演題に関して誤ってご案内してしまいました。正しくは「円覚寺の伝法衣と表具裂」と「蔭涼軒日録にみる表具裂」です。訂正してお詫びいたします。

また前号で「役員および幹事氏名」を巻末にお知らせしましたが、参与および幹事の氏名に誤字がありました。正しくは参与「林屋晴三」氏、幹事「松田剛佐」氏です。ここに重ねて訂正とお詫びをいたします。
*今号では五月に行われた茶の湯文化学会平成十七年度大会の研究発表およびシンポジウムの要旨を中心に編集しました。

役員役割分担(代表者以外は五〇音順)

会務	谷 晃(代表)	池田俊彦
中村修也		
会誌(編集委員)		
小泊重洋(代表)	岩崎正弥	高橋忠彦
谷 晃	美濃部仁	
会報		
影山純夫(代表)	飯島照仁	
大会・研究会		
日向 進(代表)	岩崎正弥	神谷昇司
佐藤豊三	高橋忠彦	竹内順一
田中秀隆	中村修也	永吉溪滋
矢野 環		
会員増加		
筒井紘一		
総合研究		
小泊重洋		
対外交流		
高橋忠彦		